

---

**私は決めた、あのジジイをぶん殴ってやると。**

メネ@未確認

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は決めた、あのジジイをぶん殴ってやると。

### 【Nコード】

N4690V

### 【作者名】

メネ@未確認

### 【あらすじ】

変な苗字の女の子は祖父を蔑んだ。

\*というおはなし。

クラス中から浴びせかけられる笑い声の中、私は激しい憤りを感じていた。ただその矛先は、クラスの皆ではない。そのところよろしく、と誰かに向けて言ってみた。

私は俯いたままこぶしを握り、そして周りの誰にも聞こえないように小さく、且つ周りの誰よりも低い声で、つぶやく。

「あの、嘘つきジジイめ」

いつの間にか、私の唇は痙攣を起こしていた。

私の苗字はオミオという。

オミオという字面だけでも十分珍妙な珍名なのに、漢字の表記が御御という、普通に見たなら目を疑うような当て字だった。私は小学六年生だが、今まで受け持ってくれた先生は誰一人としてこの苗字を読めなかった。というか先生でなくても読めた人はいなかった。

まあ注目を浴びるから友達作りやすいけど、と幼いながらも考えてみる。

それに、私はこの苗字を気に入っていた。

その理由として、以前私が祖父に向けて苗字について尋ねたとき

「ねえ、おじいちゃん」

「あん？ どうしたかい」

「あのね、ね、どうしてオミオって苗字なの？ おじいちゃんが変えたって、おかんが言<sup>ゆ</sup>うとったの」

「そりゃあなあ、長くなるけど、ええか？」

「うん、いいよ」

そう言うってから一度味噌汁を啜り、祖父は話し始めた。

「昔はな、大きい字に、御の字に、雄つてので、オミオつつ苗字だったんよ」

「ふうん、それで？」

「だがよう、雄つちゆうたら、男つて意味やろ」

「そうよねえ。雄牛は、何がなんでも男やもんねえ」

「やろう。じゃけん、わしはそんな名前、おかしいって姉貴に言<sup>ゆ</sup>うた。そんなら姉貴が、『じゃああんたがええ名前を考えんさい』と返してきおってな」

「あ、おばーちゃん？ かつこいいわあ」

「ふん、何がかつこええじゃ。あんなババアが」

「やけど、おじいちゃんだってジジイよ？」

「ええわええわ、そりゃどうでもええ」

また祖父は味噌汁を吸った。

ちなみに祖父は味噌汁が大の好物で、朝昼晩はもちろんのこと、この間はフランスパンと一緒に食べていた。曰く美味しいそうだけど、絵で見るとおかしそうだ。

「そんでな、わしゃあ一晚考えた。そいで思いついたんが、この字や。御の字を三つ並べて、オミオ」

「寝てる時に頭でも打ったん？」

「アホか。……あんな、この字には、意味があるんじゃ」

「どんな意味なん、これ？」  
「御つてのはよ、まず『尊敬』つちゆう意味がある。これにの、  
やることなすこと全てを尊敬されるように』って思いを込めた」  
「思いやのうて、センスを込めて欲しかったわ」  
「うつせえ。次によ、『女性を親しむ』って意味から、『誰からも  
親しまれるように』と解いた」  
「女性はどこに行ったん？ 黄泉の国？」  
「黙つとれ。で、最後に、『丁寧』だとか『上品』がある。そんで、  
『上品に生きられるよう、見られるように』つつう意味にした。ど  
うや、ええ名前やろう」  
「聞いたらねえ。でも、普通には分からんよ」  
「そんなのはええ。お前がそういう風に生きてくれりゃあ、ジジイ  
としてこれ以上嬉しいことはないわ」  
「……あ、自分でジジイ言<sup>ゆ</sup>つた」  
「やつぱ黙つとれ、お前」  
「はあい、はいはい」

というやりとりがあつた。当時小学二年生だったから、なん  
ともふざけた対応をしているのだけど、まあ今考えれば凄<sup>すご</sup>い苗字だ  
なあと思うのだ。

『尊敬される』、『親しまれる』、『上品になれ』、という素晴  
らしい意味が込められているなんて、おそらくこの御御御という名  
前しかないだろう。

昔は祖父のことを軽く馬鹿にしていたのだが、今では尊敬してい  
る。親しみもある。……上品かどうかは少し答え辛い、祖父はち  
やんと苗字を体現しているなあと思う。

まあそんな訳で、私はこの苗字を嫌ってはいない。

……それはそうと、今日は調理実習で味噌汁を作ることになって

いた。

知つての通り、私の祖父は味噌汁が好きだ。だから、今日は帰つて、習つた味噌汁を作つてあげようと予定している。上手く作れるといいのだけど。

「はい、じゃあ皆さん、今日は味噌汁を作りますよ」

美人で有名の家庭科担当の先生が、はきはきとした声で言った。クラスの皆が歓声をあげる。私もそれに混じつた。

「でもその前に、ちょっとだけ味噌汁について勉強しましょう」

今度はさつきとは反対に、残念そうな声があちこちから聞こえてくる。

もし美人先生でなかったら、もう暴動になっているんだろうなあと考えつつ黒板を眺めた。

黒板に書かれた文字を見て、何人かの生徒が「ん？」と小首を傾げる。私も傾げている。

何も知らない先生は、その文字を書き終わると、振り返つて話を始めた。

「はい、この名前、なんだか分かりますか？ 実はこれ、味噌汁の別の名前なんです！」

直後

調理室で、爆笑が生まれた。

**（後書き）**

お題小説【変な苗字】です。

たぶん推敲予定。

感想・批評・誤字脱字報告など、ありましたらどうぞ。

（ ・ ・ ）メネ わざとです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4690v/>

---

私は決めた、あのジジイをぶん殴ってやると。

2011年10月8日06時45分発行